

Flow Analysis 2018 旅行記

岡山大学大学院自然科学研究科 D1 谷 夢希

1. はじめに

2018 年 12 月 2 日(日)から 7 日(金)まで、タイ王国（以下タイ）のバンコクにて Flow Analysis XIV が開催された。私は学会 4 日目に研究成果を“Acceleration mechanism of vesicles via optical pressure in the presence of gold nanoparticles”と題して口頭発表をおこなった。タイには本学会の約 1 ヶ月前に初めて訪れていたため、今回の渡航は 2 回目であったが、まだまだ新しい発見が多く、とても充実した学会となった。本稿ではその学会の中で自身が学んだことや経験について、恐縮ながら書かせていただこうと思う。

2. Flow Analysis XIV

本国際学会を主催した Mahidol 大学はバンコクに本部を置く国立大学で、世界大学ランキングにおいてタイで 1 位に輝いている大変優秀な大学である。元々はタイで初めての医科大学として設立されたため、医学分野においては世界トップ 100 にもランクインしている。本学会の会場となった Arnoma Grand Bangkok Hotel はバンコク中心部に位置する 4 つ星ホテルで、ホテルの向かいにはセントラルワールドと呼ばれる巨大ショッピングモールがあり、観光客にとっては大変魅力的な場所に位置する。余談であるが、筆者はこのホテル横のデパートでほぼ毎日マンゴーを買って食べていた。タイのマンゴーはたいへん甘く、値段も日本のものと比べ 1/20 程度である。

3. エクスカーション

学会内において、エクスカーションは 2 回行われた。1 回目は 12 月 2 日、学会受付の前に行われ、サムットプラカーン県にあるムアンボーラーンという Ancient City に行った。そして 2 回目は 12 月 4 日にラーチャブリー県に行き、水上マーケットやフラワーガーデンを堪能した。

ムアンボーラーンはバンコクから南に車で 1 時間ほどに位置しており、タイの種々様々な文化遺産を見ることができる。タイは数々の素晴らしい遺跡や仏塔建築があることはよく知られているが、その数はあまりにも多く、しかもタイ全土に広がって存在している。したがってその全てを見て回るにはかなりの時間と費用を要する。しかしこの

ムアンボーラーンはタイ全土の文化遺産を一同に集めかつ実物大で忠実に再現しているため、タイの歴史、文化、生活習慣を 1 日にして知ることができる。私たちは 40 人ほどの大所帯であったため、専用のトラムを使って 2, 3 時間ほどかけて園内を見て回った。Fig. 1 は園内の建造物の一部を示すが、他に 100 ヶ所以上の建造物があり、しかも現在も増築中だそう。今回は時間の都合上ある程度目処をつけて回ったが、また今度 1 日ゆっくり来たいと思える場所であった。



Fig. 1 園内の建造物の様子



Fig. 2 インドネシア、慶應義塾大学の方々との写真

4 日に訪れた水上マーケットでは、タイ屈指の観光地ということで、まさしくタイに訪れたのだなと実感し、とても気分が高揚した。運河には果物や飲み物を積んだ大量の商船が行き来しており、観光客はボートで運河クルーズをしながら買い物を楽しむことができる。バスのガイドさんからあらかじめ、水上マーケットは値切ることが前提で若干価格設定が高くなっているので買い物の際には頑張って値切るように聞かされていた。船にはタイの友人も乗っていたが、まずは私一人で値切ることに挑戦した。拙い英語で「too expensive!!」, 「give me more discount!!」と結構粘りながら話していると、最終的に半分程度になった。

隣のタイの友人はここまですると思っていなかったらしく、大笑いしていたのをよく覚えている。

その後のフラワーガーデンでは色々な国の方々と話をする機会もあり、とても充実した時間を過ごすことができた。昼食はこのガーデン横で食べた。ちなみにタイ料理は本当に辛い。現地の人にこの料理は辛いか尋ねた際に、「A little bit.」との返答がきたら絶対に信用してはいけない。私はこれを信じて何度も痛い目にあった。だが辛味の中にも美味しさがあり、筆者は酸っぱい料理が好きなのでトムヤムクンをよく食べていた。だが辛い。

4. 学会発表と懇親会

筆者は国際学会に参加するのは初めてであり、しかもその初めてが口頭発表ということでひどく緊張した。日本人で口頭発表する学生は私しかいなかったこともさらに緊張を増大させた。しかし日本人の研究者の方々が発表直前まで励ましてくださり、加えて発表後にはたくさんの労りのお言葉をいただいた。海外の学会だと同じ日本人というだけで親近感を覚えたり、日本の学会よりも教授の方や研究者の皆様に気軽に話しかけたりできるというのは、国際学会の大きな魅力だと考えている。このある種一体感のようなものは、学生にとっては大変ありがたいものであった。一方で質疑応答では答え方を間違うといった反省すべき点もたくさんあった。他のアジア圏の国の学生たちは当たり前のように英語を流暢に話す。タイの学生に、タイの学生はみんな英語が得意なのか尋ねると、そんなことないという答えが返ってきた。とすると、今回学会で出会った学生はみな等しく努力をしているのだ。私がこれから生きていく先に、英語は不可欠である。タイやインドネシアなど、英語圏ではない学生たちと話していると、私も負けていけない、この様になりたいと刺激を受けたことは、私の国際学会のける最大の収穫の一つであった。特にインドネシアの学生たちとはとても仲良くなり、たくさんの思い出を作ることができた。



Fig. 3 インドネシアの学生たちとの記念写真

最終日前日の6日夜にあったバンケットでは、それぞれの国からの参加者が一つや二つダンスや歌を披露した。私

たちのグループはAKB48の恋するフォーチュンクッキーを披露した。この曲は日本と同様にタイでも国民的人気がある曲だそうで、とても盛り上がった。バンケットの最後には1時間半もの時間を割いて学会の参加者たちで歌い、踊った。この学会は毎回このように盛り上がると思っていたのだが、後から聞くと今回はいつも以上に盛り上がったらしい。だとするとそれはひとえにタイの人々の国民性だと思う。タイの人々はみな明るく、そして親切である。私は学会中ときおり一人で歩き回っていたのだが、道や場所が分からなくなった際など、尋ねると気軽に教えてくれたし、親切に案内までしてくれた。主催大学の学生たちが私たちを心から歓迎してくれていることは行動の節々に感じていたし、それは大変心地よいもので、私はこの学会の魅力にすっかりはまってしまった。



Fig. 4 参加者みんなで踊る様子

5. まとめ

今回の学会に参加したことは、私の人生の中でも忘れることのない思い出の一つとなったことはいまでもない。特に博士後期課程1年目で世界に目を向け、関わる機会を得たのは、とても恵まれていた。一生懸命話しかければ、私の拙い英語でも丁寧に聴いてくださり、積極的に行動すればたくさんの方と繋がりを持てるということが実感できた。反省すべきことは早速に見直し、またこのような機会に参加できるよう、そしてさらに充実した研究生活を実現できるよう、一層精進していきたい。

最後に、本国際学会に参加する機会をくださいました金田 隆教授に深く感謝いたします。



Fig. 5 タイの学生とディナー（筆者は左手前）